

狩野探信守道にみる江戸狩野派の新画風創造の一端

薄田 大輔 (学習院大学)

狩野探信守道(1785-1835)は、探幽(1602-1674)を祖とする鍛冶橋家七代目当主である。江戸狩野派は、粉本主義の弊害によって独創性を欠いたと批判されてきたが、18世紀半を過ぎる頃、木挽町家を中心に、新画風を模索する動きが現れる。そして、探幽以降目立った絵師を輩出しなかった鍛冶橋家にも、他家よりは遅れるが、探信守道が登場し、江戸狩野派様式の輪郭を広げることとなる。

近年、狩野派研究者等が守道に注目するのは、板橋区立美術館蔵「浮世美人風俗図」などの発見により、守道が近世初期風俗画を翻案していることが知られたからである。守道の作画の全体的な把握、画風の特徴を明らかにするモノグラフ研究の必要性は高まり、基礎研究に向けての環境も整いつつあるといえよう。本発表では、代表作、馬の博物館蔵「富士巻狩図屏風」を中心に、守道の画風に見られる<新しさ>を検証し、併せて初期風俗画の学習成果がどのように反映されているかを見ることとする。

まず、守道は自家の祖探幽への回帰によって、江戸狩野派に新風を送り込む。18世紀以降の江戸狩野派は、「四季松図屏風」(大徳寺蔵)に見られるような探幽の没骨的な彩色法、面的な形態把握を踏襲しないのだが、守道はむしろそのような描写を取り込み、探幽へと回帰する。一方で、武士の顔貌は、中世の合戦絵巻を基にしながらも、鼻や口を誇張して大きく描き、輪郭を頬骨より顎にかけ異様に張るなど独自の表現も見られる。しかし、最も注目すべきは、武士装束の描写である。車輪文や花文を黒・赤・黄・緑・青・白とスタンプを押すように重ねながら充填させるものや、桃や紫、青のグラデーションなど、中世の武士装束を完全に無視した華やかな直垂を身に着けさせている。このような描写は他の狩野派の武士の描写には見られず、初期風俗画や菱川師宣(?-1694)等の初期浮世絵などに見られる小袖の文様や彩色の学習応用であった。また、富士巻狩とは関係のない野外での調理や飲食、川で水浴びをする馬と武士といったモチーフは、野外遊楽図など近世初期風俗画のイメージが流入した結果である。守道は、翻案作以外でも初期風俗画の構図や図様を自らの画風に反映させている。

ところで、同じ頃、酒井抱一(1761-1828)とその周辺で初期風俗画の翻案作が多く制作されているが、その背景も明らかにされていない。実は、守道周辺の江戸狩野派の絵師や弟子には、抱一らと交流を持ち、江戸琳派風の画風をみせる絵師たちがいるのである。さらに、守道と池田孤邨(1801-1866)の翻案作品は、顔貌表現がよく似ており、共に画中に自派を主張する画風の屏風を描くなど趣向も近い。守道の新画風確立を江戸狩野派の孤立した動向としてではなく、同時代の造形活動全体の問題として捉えなおすことで、19世紀における初期風俗画・初期浮世絵回帰に関する、より大きな議論へと探信守道研究を開きたいと思う。